

## 続・ブッシュ葬儀劇場——「大いなる目覚め」とペンス副大統領

Greatchain

2018/12/21

昨日、ネット上で見た統計によると、アメリカ人の間で、「現在、何が祖国にとって最も大きい脅威か？」という質問に対し、91%が「深層国家」と答え、5%が「ロシア」、4%が「テロリスト」と答えたという。もしこの通りだとすると、これは驚くべき数字ではないだろうか？ トランプの就任直後に、ジョージ・ソロスの扇動があったとはいえ、あれだけのトランプ排斥運動があったということは、誰が自分の敵なのかわからない人々が、いかに多かったかを物語る。今、大多数の人々が真相に目覚め、トランプに対し「ありがとう」の声をかける熱狂的な人々（特に女性）のビデオが見られる。「ありがとう」とは政治家を支持する言葉ではない。敵から護ってくれた人という言葉であり、この場合それは、「敵に気づかせてくれてありがとう」という意味であろう。

12月5日のブッシュ大統領葬儀“劇場”で、いよいよ人々は、仮面をかぶっていた敵の顔を確認することができた。これはもちろん、徐々に起ったことだが、一気に起こったとも言えるであろう。おそらく、大多数の人々にとって思いがけなかったのは、封筒をもらった人々の中に、現副大統領のマイク・ペンスがいたことだった。しかもそれは、まさに巧妙な演出のように、ペンスは硬直して動かず、彼の妻がもつパンフレットに、封筒が挟まれているのがはっきり確認できた。

まず、ここからわかることは、この劇が、トランプの演出したものではないということである。すなわちこれは党派争いの劇でなく、絶対的な善悪闘争の劇だということがわかる。それは、Qが予言的に、「あなたは苦痛を見る用意があるか？」と言ったように、トランプにとって苦痛だった。実際、SGT Reportによると、ペンスは、子供セックス人身売買にかかわったことがあるらしい。深層国家の泥沼の深さが想像できる。Qは容赦をしない。Qは、「天網恢恢疎にして漏らさず」（天の網は粗いようで悪を漏らさない）という言葉の、天の役目を果たしているように見える。これは「天」と言うのがよい。「神」というとややこしいことになる。

今、この中国（老子）の言葉ほど、世界に重くのしかかっている言葉はない。グローバリスト犯罪集団は、今ついに、滅びの坂を転げ落ちることになったが、彼らがここまでやってきたのは、ひたすら「隠す」ことによってであった。もちろん武力も暗殺も使うが、彼らの主たる戦術は、真実を「隠す」ことであった。そしてその手段は主としてメディアであった。かりに心が丸見えで、人は誰でも他者の心が見えるものだったとしよう。秘密結社も NWO も成り立たなくなる。彼らにとっては、民衆が真実に「目覚める」ことが一番恐ろしいことだから、我々を眠らせておく“愚民政策”が必要である。そう考えてみると、ほとんどの謎が解決することがわかる。「隠し事や謀り事をする国家は許せない」と言った JFK を殺したのは、彼らであった。霊的な進化（すわわち覚醒）を、彼らは最も恐れるから、ダーウィン進化論という愚民教育が必要だった（NHKなどはよく聞いてほしい）。しかも、この証拠のない説が、彼らにとって非常に都合なのは、我々を殺す口実がそこにあったからである（優生学、道徳など存在しない、人間もサルも変わらない、地球は宇宙のゴミ）。

進化論を真理として認めるなら、あらゆることが許される。そしてその究極の形がペドフィリアだった。事情を知らぬ人は、「世の中にはそういう異常者もいるだろう。そういう暗黒世界もあるだろう。しかしそんなものは周囲が許さないから、しっかり取り締まれば、やがてなくなるさ。」ところが今、わかってきたのは、それとは正反対のことだった。だれも批判することのできない最高権力者の間で、完全に隠された状態で、この神も人も許さない犯罪が、「文化」として行われていた。その代表者が、先日の葬儀の役者だった（死者を入れて）。我々はこのような者たちを、発狂し、発病した者たちと呼んでいる。それ以外に呼びようがないからである。しかし、サタン信仰という、神の完全否定と神への憎悪の立場に立つならば、想像を絶するどんなことでもできることを、我々は知らないでいる。もし、完全に狂ったことが、正常なこととして通用するようになったら、どうするのか？ 我々は挑戦を受けている。

そこで我々は、ある仮説を立てざるをえなくなる。これは我々の世界への、神の介入 (divine intervention) ではないのか？ あのブッシュ葬儀も含めて、今、世界的に起こっていること全体が、神の導く劇なのではないか？ もし我々が、人間も地球も宇宙も含めて、これは偶然によって自然発生したものすぎないと考え、自分を創った創造者を忘れるならば、世界はこのような、收拾のつかないことになることを、教えるためではなかったのか？

今、起こっていることはアメリカのことで、我々日本人には関係がない、などと言う人がいたら、それは大間違いである。むしろ、ダーウィン天国であり、主流メディア天国であるわが国こそ、最も大きな影響を受けているとも言える。こういうふうと言う人がきつとあるだろう：—「自分はペドフィリアなど、とんでもないことだと思っている。しかし神とか創造者などという科学に反するものは信じない。」しかし、今聞こえているのは、そのように考

えることの矛盾に気づけ、という天からの声である。「しかし、私はキリスト教徒でもなく、特に何の信仰もっていない。こういう問題はもっとも中立であるべきだろう。」これには、こう答えるべきである：—「あなたの考えている科学的唯物論が中立なのではない。我々の生きている世界には、最初から**創造**ということが組み込まれているのだ。それは生命も同じであり、無生物がまずあって、そこから生命が出てきたのではない。非常にわかりやすい話ではないか。**創造者は存在する。それが今見えてきたのだ。**」